

大学経営政策研究

第15号 (2025年3月発行) : 125-142

## 戦前期を対象とする学生紐帯形成研究の系譜と展望

長谷坂 大 樹



# 戦前期を対象とする学生紐帯形成研究の系譜と展望

長谷坂 大樹\*

## はじめに

本稿の目的は、戦前期を対象とする学生の紐帯形成に関する研究の系譜を整理し、今後の展望を示すことである。高等教育研究において、高等教育史、大学史が占める位置づけの重要性は、伊藤(1993)など多くの研究者が指摘してきた。また高等教育史は、大学史研究会をはじめとする研究者集団により研究が蓄積され、研究動向の整理・分析が行われてきた。しかし、個別の事象に関する歴史的研究の整理は未だ限られている。特に学生については、近年、学生による大学運営への参画、主体的な学修者としての学生の重要性が高まっているにも関わらず、歴史研究の体系的な動向整理の対象となっていない。寺崎(1986a)は、学生史、青年形成史を高等教育史研究において今後発展が期待される分野として挙げたが、近年も「研究焦点の中心は、制度・政策研究にあ」り(戸村2019: 5-6)、学生研究は未だ検討が十分でない。佐藤(2003)は「大学文化史学」を提唱し、学校紛擾史、学生生活文化史、学生サークル文化史など、大学に関わる事象を28の分野に分類した<sup>1</sup>。このうち特に学生の連帯と学校への帰属意識は、学生の活動成果を左右する肝要な因子であるにも関わらず、等閑視されてきた。本稿では、学生の紐帯形成という概念に着目し、高等教育のフィールドにおいて学生たちがいかに集団を形成し、活動を展開したか、またその系譜と課題、展望を明らかにする。

学生が集団を形成する動機は多様だが、そこに強い希望や目標が存在することは共通している。学生に関する研究を紐帯形成の観点で整理することにより、学生の持つエネルギーの根源を明らかにする作業につながる。今日では学生の多様性が増し、学生像、学生生活を解明する重要性は日ごとに増している。コロナ禍の人的接触不足、米国の学生運動激化など、学生紐帯形成の理解は現代においても喫緊の課題である。こうした問題に対し、これまでは戦後1960年代以降の大学紛争の分析が行われることが多かった。これは後の大学改革の契機となった事象であり、その重要性は論を俟たない。しかし、戦前期における学生運動、学校紛擾、また紐帯形成の分析は、戦後に比して検討が十分でないのではないかと。

学生は明治期よりエリート層の象徴として捉えられ、書生の存在は文学等諸作品に数多く描かれた。大正・昭和期になると、学生運動の活発化により、政府や大学は学生思想問題への対応を余儀なくされた。学生は、社会に期待される存在から対処すべき存在へと変化したのである。さらに戦時期になると、学生は兵力の一部と見なされた。戦前期はこうした各時期の関心に応じて、学生に対する思索が行われた。体系的な考察が進んだのは、戦後1960年代である。大学紛争の全国化、高等教育研究者集団の誕生に伴い、学生研究は飛躍的に進展した。以上の推移で、学生研究は、学校

\* 東京大学大学院教育学研究科 博士課程

紛擾、教養論、青年論など様々な観点で行われてきた。しかし高等教育の原点である戦前期において、学生生活の背景にある学生、大学の紐帯に関する問題は指摘されてこなかった。

本稿は、戦前期を対象とする学生紐帯形成に関する研究群の整理を試みるなかで、これまでの研究蓄積が有していたかもしれない示唆、その到達点と課題を浮かび上がらせ、今後の方向性を示すことを目指す。これは現代の学生問題に通底する分析であり、高等教育史研究の一端のみならず、学生を取り扱う基礎的な議論に資するだろう。

## 1. 研究レビューの枠組み

### (1) 学生紐帯形成研究の概念整理と扱う範囲

まずは学生紐帯形成研究の概念整理を行う。渡邊（2020）は、「共同体としての学校」の起源を解明する試みにおいて「ゲマインシャフト」概念を整理したが、本稿における紐帯は、渡邊が述べる自然的、直接的な社会単位であるゲマインシャフトであり、人為的、間接的な社会単位であるゲゼルシャフトではない。つまり、制度として与えられた学年、クラス等の単位を本質とせず、学生が自らの意思で形成する「心情的一体性」（宮澤 2011: 63）が伴う集団を対象とする。また、教師の紐帯形成を分析した兼安（2019）は、学校内の同僚性の機能に着目したが、本稿における学生の紐帯形成は、長谷坂（2024b: 62）が「紐帯形成には、学生間、学生団体間、学生・教員間等の階層が存在する」と述べる通り、学生間のみならず学生・教員間も対象とする。学習・研究活動であれ、課外活動であれ、抗議行動であれ、目的の規模が大きくなるほど、紐帯・集団形成の必要性は高まる。特に戦前期は、高等教育の拡大と思想運動の影響が大きいため形態は一様でなく、紐帯形成を捉えることは難しい。しかし、現代に連なる学生紐帯形成の源流を捉える意義は大きい。本稿の目指す学生紐帯形成研究の動向整理は以上の問題関心に基づく。それでは、学生紐帯形成研究とは、いかなる研究群を指すのだろうか。

本稿では、紐帯形成研究を学校紛擾研究、学生表象研究からなると定義する。佐藤（2003）は、大学文化の歴史を高等教育史・大学史という教育史のアプローチのみならず、日本近現代史の一環として研究される必要を述べ、「大学文化史学」を提唱した。佐藤の28分類<sup>2</sup>のうち、本稿は「学校紛擾史」、「学生政治社会運動史」を学校紛擾研究、「学生生活文化史」、「学生サークル文化史」、「学生スポーツ文化史」、「カレッジソング史」を学生表象研究として整理する。

学校紛擾研究は、学校紛擾、学生運動に関する研究群とする。学校紛擾は、学生が目的実現のために紐帯形成を要する事象の代表例である。戦前期の学校紛擾は学生思想問題と不可分であり、本稿では学校紛擾研究として学生の思想を論じた研究も取り扱う。しかし、紛擾の発生背景として関連し得る研究に限定し、思想自体の内容を検討したものは取り扱わない。また東大新人会や精神科学研究会など学生団体による活動、自治に関する研究も含むものとする。

一方、学生表象研究は、学生像を捉える研究群とする。一般に学生に関わる表象といえば、制服や校旗、学生歌や寮生活におけるストーム、スポーツの対校試合等を示すことが多い。しかし、本稿では学生の生活慣習、文化に関する研究も取り扱う。学生文化の指す範囲はあまりに広範に過ぎるが、教養論や青年論など学生生活における自己表現と成果形成の基盤に関する研究を対象とす

る。戦前期学生研究として伊藤（2006）はキャリア、羽田（2007）は留学生に関する研究を論じたが、学生表象研究ではこれらは対象としない。

ここで学校紛擾、学生表象、紐帯形成の関係を整理する。紛擾は紐帯を強化し、表象を生む。例えば、1931年の慶應義塾高等部同盟休校では、窓からスローガンを書いた旗を示し、運動が加熱した（「慶應に珍しい殺気立った騒擾」『東京朝日新聞』1931年2月7日）。一方、表象は、紐帯の強化・継承に寄与するが、紛擾の争点ともなる。同校の例を挙げれば、1927年に慶應義塾予科の制服に襟章を導入し本科生、予科生の区別を企図したが、塾生の反発を招く問題が発生した（「予科生のえり章は一般に評判悪し」『三田新聞』194号、1927年4月27日）。つまり、紛擾と表象は紐帯の基盤となり、紛擾と表象は相互関係にあるといえる。

以上の通り、本稿は第一に学生が共通の目的のもとに自発的に結束する事象を取り扱った研究を対象とする。集団による活動、集団形成に関連する活動を対象とするが、キャリアや同窓会の研究など、在学生以外の研究、学校制度や政府の議論は対象としない。しかし、この定義に当たらない場合も、結束の基底に存する思想や行動様式に関連すると思われる研究は触れることがある。

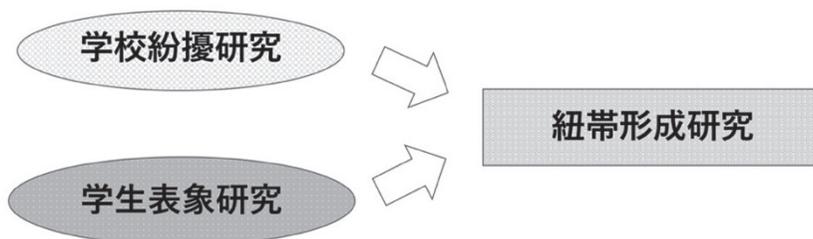


図1 学生紐帯形成研究の概念図

## （2）研究史レビューのための時期区分と課題

研究史レビューにあたり、本稿では先行研究を研究実施時期で区分し検討する。これは歴史研究において、研究対象・時期の選定が研究当時の背景や研究の蓄積・傾向による影響を強く受けるためである。例えば、戦前期における学生思想問題、戦後の高等教育拡大、大学紛争が発生した時期は、当時の研究関心に相関が見られる。本節では高等教育史、大学史の先行レビューを参考として、学生紐帯形成研究レビューに相応しい時期区分を決定する。

高等教育史、大学史の研究動向レビューは、1980年代以降継続的に行われてきた。高等教育史研究の本格的な蓄積は1960年代からとされるが、寺崎昌男はこれらレビューの先鞭をつけた。寺崎（1986a）は、先行研究の限られていた1950年代末から1980年代までの動向を整理し、専門学史分野や沿革史研究との協同の必要性を指摘した。さらに寺崎（1986b）では、大学史研究の動向と課題を整理し、沿革史編纂が大学の改善・改革の指針になり得ると述べた。

また1990年代に入ると、伊藤（1993）が高等教育史研究について1960年代初頭以降を中心に4時期に分けて回顧を行い、学際性の維持と今日的問題に有用であるべきとの展望を述べた。そして木村（1997）は、戦時下の教育科学研究を歴史社会学研究、戦争責任研究、社会史研究の動向において整理し、1930-1940年代前半の社会・教育過程を解明する必要性を主張した。

2000年代初頭以降は高等教育研究への関心の高まりに伴い、高等教育史研究も増加した。谷本(2002)は主に1980年代後半以降の高等教育史研究の動向分析を行い、政策・財政・制度史研究の進展、大学・高等教育機関の構成要員・条件の実態分析、新たな通史的研究への期待を述べた。また伊藤(2006)は、1993年から2003年の研究レビューを時期とジャンルに分類して行い、研究の専門化と学際化が相互に影響しない点や、個別沿革史編纂に代表される高等教育史の研究分野としての生き残りを課題として挙げた。そして高等教育史研究において個別沿革史の扱いは重要だが、西山(2007)は大学沿革史の編纂動向を概観し、大学沿革史が記念や顕彰のみならず、学術研究の成果となりつつあることを示した。またこの時期には、高等教育研究における中心的学会の一つである日本高等教育学会で高等教育史が特集された。羽田・大塚・安原(2007)は、2000年初頭からの10年で高等教育史研究が飛躍的に拡大したと述べる一方、歴史研究の理論化と高等教育研究の実践への偏りを課題として示した。さらに戦前期を対象とする研究について、大学紛争後に進学した世代が研究者として円熟期を迎えていることを指摘し、特に学生研究の発展が見られるとした。

2010年以降の動向では、まず2019年の『大学史研究』における特集「大学史・高等教育史研究のこれまでとこれから」がある。戸村(2019)は、大学史・高等教育史研究動向の年代区分について「伊藤の言う1960年代初頭を前史的時代、1960年代半ばから70年代を研究本格化時代、1980年代を専門化時代、1980年代以降を再隆盛の時代とする見解は同僚の多くに受け入れられている」と述べた。また同じ特集で、羽田(2019)は、大学史研究の半世紀を概括し、学問の制度化の視点から大学史研究の現状と課題を整理した。

本稿では各研究を(1)1960年代初頭まで、(2)1960年代半ばから1980年代、(3)1980年代半ばから1990年代、(4)2000年代、(5)2010年代から2020年代に分割する。(1)から(3)は、伊藤(1993)の分類に倣い設定した。伊藤は、1993年までの高等教育史研究の展開を4時期に区分した。(1)1960年代初頭まで-前史的時代-、(2)1960年代半ばから70年代まで-本格的な研究の始まり-、(3)1980年代-専門化の進展-、(4)1980年代末から90年代-再びの隆盛?-である。本稿は伊藤の理解を共有するものであるが、当該論文執筆時から30年以上経過しているため、本稿では1970年代と1980年代は「専門化の進展」という特徴のもとに同一の分類とした。また以降の時代は(5)2000年代、(6)2010年代から2020年代に分類する。これは羽田(2007)による2000年代における10年間の研究動向整理の成果を踏まえ、基礎概念検討の点において2000年代と2010年代以降に差異が見られたためである。学校紛擾研究と学生表象研究のそれぞれで、戦前期から現在における研究動向を(1)から(5)に区分する。

青年集団史を分析した佐藤守は、「本来、青年集団の人的交渉の形態は、共感的交渉、同僚的交渉であるよりも、同志的交渉が支配的である」(佐藤 1970: 541)と述べた。本稿では、本指摘を参考とし、同志的交渉は学校紛擾研究、共感的交渉、同僚的交渉は学生表象研究と整理する。一方、大正・昭和前期の青年団では「青年団員をつなぐ紐帯は、ある主義思想に対する共鳴と云うのではなく…青年の社交欲であり、その自然的友愛の至情」(田澤 1930: 80)との指摘もある。地方生活を基礎とした青年団と高等教育機関の学生集団では条件や環境が異なるが、学生の紐帯形成はいかなる形態を取り得るのだろうか。各研究レビューの後、同志的交渉(学校紛擾研究)が共感的

交渉、同僚的交渉（学生表象研究）より支配的との議論が学生紐帯形成に当てはまるかを考察する。

以上より、本稿では次の課題設定を行う。第一に、学校紛擾研究の現状を考察する。第二に、学生表象研究の状況を分析する。最後にこれらを踏まえ、学生紐帯形成の形態を考察し、研究動向の課題と展望を整理する。以下では、まず学校紛擾研究の動向整理を行い（第2節）、次に学生表象研究の動向検討を行う（第3節）。最後に学生紐帯形成研究の現状と展望、総括を述べる（おわりに）。

## 2. 学校紛擾研究

### （1）1960年代初頭まで

戦前期における学校紛擾研究は、大正末期以降に本格化する学生思想問題への対処の必要から行われた。例えば杉山（1930）は、大正期以降の学生運動史をマルキシズムと他の指導原理に分けて原因を探究した。また能勢（1931）は、複数の同盟休校の事例を通して、学生運動と左翼運動との関係性を述べた。そして吉野（1932）は、明治期以降の学生運動を整理し、第一次世界大戦以降の学生運動は学生独自の運動ではなく、主として左翼陣営の一部として展開されたと述べた。さらに、文部省の調査をもとに、河合、蠟山（1932）は、学生思想問題の性質・観点・原因・対策を述べた。他にも東大新人会以降の学生運動に着目した研究もある。東大新人会は、戦前期「最高の権威と最大の組織力をもった学生団体」（後藤 2011: 52）であり、マルクス主義による組織的活動は分析対象とされてきた。大久保（1943）は、上代から大学令に至る大学通史の整理を目指し、特に大正期以降の学生社会運動について新人会から全国への波及を論じた。また林（1947）は、自身の学生生活を通して、東大新人会による例会、講演会の実施、他大学の学生団体との連絡、記念祭への参加等の活動実態を描いた。

終戦直後には、菊川（1947）が、1918年から1932年の学生社会運動の発展段階を学生の特質に着目して考察した。大室（1951）は、戦前・戦後の学生運動を大正から昭和初期の左翼学生運動、昭和10年代の右翼学生運動、戦後の学生運動に分類し、各特徴を青年心理の観点から整理した。菊川、大室の分析は戦前に比して思想的空白を迎え、希望の実現に性急となった戦後学生運動の視点から戦前を捉えた萌芽の研究であった。研究分野としての高等教育研究は存在しない時期だが、学生思想問題への関心からすでに左翼運動に着目した学校紛擾研究が確立していたと整理できる。

### （2）1960年代半ばから1980年代

1960年代半ば以降、戦前期を対象とする学校紛擾研究は一時少なくなる。しかし、1960年代後半から、高等教育の研究者群が確立すると、従来の学生思想問題への対処とは異なり、教育史、科学史、法制史等の学際性の高い集団による高等教育史研究が行われた（伊藤 1993）。

こうした多様な関心のもとで教育史としての学校紛擾分析に着手したのが寺崎昌男である。寺崎（1971）は、明治期における学校紛擾を、頻度や係争点、学校種別の違いから体系的に整理した。また東大新人会を対象とした新たな研究群も発表された。豎山・石堂（1976）は、1969年1月の新人会集会の記録、関係者の回顧、解散時の史実から、関係者の語りによる実像を描き出した。そしてH.スミス（1978）は、東大新人会を分析し、近代日本青年の思想的発展および社会運動の展開の

中で、学生運動を新しい時代を画した重大な現象と捉えた。大学紛争の時代背景において、種別化等の量的観点と語り等の質的観点の両面から戦前期の学校紛擾を実証した時期だったといえよう。

### (3) 1980年代半ばから1990年代

1980年代半ばから1990年代は、高等教育史研究全体の進展に伴い、学校紛擾研究の蓄積もみられた。従来の学生思想問題、東大新人会にとどまらない発想での研究が行われたことが特徴である。大橋・須田編(1992)は、東大、京大、東京商大、東京高校、松本高校等を事例として、戦時体制下に学生がどの程度抵抗運動を行えたかを明らかにした。また海外の事例を扱った研究もある。潮木(1986)は、キャンパスにおける紛争発生の一因を青年のエネルギーとし、明治期日本と19世紀前半の米国における復唱の事例を参照し、統制の方策を検討した。

大正末期から昭和初期の高等教育拡大期については、伊藤彰浩が重要な指摘を行った。伊藤(1999)は、量的拡大による変動の諸相として、就職難と学校騒動(学校紛擾)を取り上げた。特に学校紛擾について、発生要因や形態、類型の整理を行い、左翼運動・思想が一定の影響を及ぼしたが、閉塞感や学生生活の不満など多様な要因が存在することを指摘した。そして東大新人会を対象とした研究も進展した。中村(1997)は、大正・昭和期を通じた社会運動及び社会思想の一端を描くことを目的とし、東大新人会が発刊した機関誌を中心にその思想と活動を分析した。

中等教育を対象とした研究だが、高等教育史研究に示唆を与えるものとして、斉藤(1995)は、明治後期における中学校の日常的な教育実態を「競争と管理」という二つの相から解明した。斉藤による「学校対行政当局、教員対教員、生徒対学校、生徒同士」との同盟休校の分類は、高等教育でも成り立つ。学校紛擾の要因分析に思想以外の視点が加わり、同盟休校の分類が示されたことによって、紛擾による紐帯形成過程の一端がより明確となった。

### (4) 2000年代

2000年代は、井上義和、占部賢志による日本主義的運動の探究が特徴的である。従来学校紛擾研究は、左翼運動の文脈で検討されることが多かった。しかし、井上は、1930年代半ば以降の日本主義的運動に関する研究を行った。その先駆けは井上(2001)の文学青年と雄弁青年に着目した知識青年論の検討であり、井上(2008)では小田村事件に着目し、三井甲之、蓑田胸喜に連なる昭和10年代の日本主義的學生思想運動を整理した。また井上は旧制高校的な教養主義が右傾培養器としても機能したことを示した。そして占部(2004)は、東大の精神科学研究会を分析し、昭和10年代学生思想運動の内容と学校当局の学生管理を解明した。

明治期を対象とした研究としては、富岡(2004)が京大の自彊会による寄宿舎改革活動に着目し、学生団体の活動が校風に与えた影響を検討した。大正・昭和期については、小野(2008)が社会状況や政治情勢と関係がない要素によって学校紛擾が統発した可能性を指摘した。さらに竹内(2001)は、平賀肅学に至る東大紛擾を整理し、昭和初期の旧制高校、大学予科が左傾培養器であったことを指摘し、教養主義の内面化が強い者ほど左傾化したと述べた。佐藤(2005)は、明治期から1930年代の学校紛擾を初中高等教育を問わず、「学ぶもの」としての生徒・学生に着目して考察した。

この時期は高等教育史研究の飛躍的な拡大に伴い、学校紛擾研究も日本主義的運動や昭和期など対象や時期の広がりがみられた。

### (5) 2010年代から2020年代

2010年代に入ると、共同体に着目した研究が行われるようになる。後藤(2011)は、戦間期の東大新人会を分析し、読書実践が新たな共同性を模索する社会運動だったと述べた。私学を対象とした研究として、岩田(2012)は、1930年の早稲田大学同盟休校を分析し、紛擾が結果的に大学の凝集力を強化したと指摘した。また長谷坂(2024b)は、昭和初期の慶應義塾における学生自治権獲得運動を分析し、運動が学生の共同体意識を「団体」から「学校」に拡大する過程であったと明らかにした。そして大隈(2024)は、京大の学生思想問題への対応を通じ、大学自治における学生の自由の位置づけを考察した。近年の研究動向について、羽田(2019)は、研究者層の拡大による高等教育史研究の「たこつぼ化」に警鐘を鳴らしている。学校紛擾研究で進展する共同体の分析では研究の進展を生かし、従来取り上げなかった領域を包摂することで新たな視座が構築されることを期待したい。

## 3. 学生表象研究

### (1) 1960年代初頭まで

戦前期には高等教育研究としての学生表象研究は存在しなかったが、明治期以降社会での位置づけが変化した「学生」を捉えたすぐれた研究群がすでに存在していた。これらは、重要な先行研究であると同時に、同時代の人物による史料的价值を有する。戸坂(1936)は、学生の実像と社会的役割を論じ、1928年頃と比較して学生生活がサラリーマン生活の予備校に変質したと指摘した。また三木清編(1937)は、昭和前期の学生の性格や教員、大学、社会との関係を複数の著者が論じ、特に戸坂は学生論の要点を整理した。そして大室(1940)は、東大の学生を対象に、一日のスケジュールや愛読書、思想等から学生の実像を描いた。

終戦直後には、戦争の動員と学制改革で影響を受けた学生像を描く研究が生まれた。大学新聞連盟(1948)は、終戦直後の学生の実態を学問、文化、思想、経済生活、食生活等の観点から分析し、1943-1945年を昭和學生史の「どん底」と位置づけた。また1928年から終戦までの学生と思想の関係を整理し、学生を比較的高い知能が期待できる若い民衆と捉えた。そして唐木(1949)は、大正・昭和初期の教養派の台頭と特徴、後退を整理し、東大新人会や早稲田大学民人同盟会における知識階級の社会活動を分析した。さらに唐澤(1955)は、学生を時代の象徴と捉え、回想録や自伝を用いて学生生活の社会史的考察を行った。他にも玉城(1961)は、学生史こそ日本近代史の振幅を端的に示すものと捉え、幕末から戦後に至る日本学生史をまとめた。これらの研究は戦前から戦後に亘る学生像を示し、戦後新たな大学の構築に寄与する教育学上の基礎的研究となった。

### (2) 1960年代半ばから1980年代

1960年代半ばから1970年代は大学紛争が激化した時期だが、学生表象研究はあまり多くない。

戦前期への関心よりは、当時の問題状況に立脚した研究が進められたといえるのかもしれない。

1970年代末から1980年代になると、旧制高校に着目した研究が行われた。高橋（1978）は、旧制高校を特に顕著な独自の性格と内容を持つ学校と捉え、寮歌、校風、運動競技の観点から旧制高校の特性と役割を考察した。また Roden Donald・森敦（1983）は、19世紀末から第二次世界大戦開始までの旧制高校における行動様式の変容と継承を検討し、これまで分析の俎上に上がらなかった学生文化を明らかにしようとした。また京大を対象とした研究もある。潮木（1984）は、明治期の京大法科大学が独自カリキュラムを確立する過程を整理するなかで、出身高校、進路の観点から京大法科の学生像を検討した。旧制高校や京大の分析といった研究対象の拡大からは、高等教育研究者の確立による研究範疇拡大の様相が窺える。

### （3）1980年代半ばから1990年代

1980年代半ばから1990年代には、教養主義、寮歌やスポーツ等、多様な観点から分析が進められた。教養主義について、修養主義からの成立過程を述べたのが筒井（1992）である。筒井は、旧制高校生の読書傾向を通じて昭和期のエリート文化を考察し、教養主義が昭和40年頃まで青年学生文化の主潮流だったと明らかにした。また戦時期の教養主義に着目した田中（1992）は、戦時期における教養主義の「復活」を『学生叢書』を手がかりに分析し、戦時期の教養主義的言説が学生を普遍的教養の世界へと逃避させる限りで影響力を発揮したが、身近に迫った死の意味づけや正当化には十分な力を発揮出来なかったと述べた。筒井（1995）は、旧制高校生をはじめとする学歴エリート文化としての教養主義の成立と展開を検討し、大正末期から昭和初年にかけてマルクス主義とモダニズムが旧制高校生文化に存在したことを明らかにした。さらに渡辺（1997）は、1930年代の教養論の総体を明らかにすることで、一般教育課程と高等教育における教養の在り方の手掛かりを模索した。そして竹内（1999）は、旧制高校を主な対象として学歴貴族文化の解明に取り組み、出身階層や教養の観点から学生文化を浮き彫りにした。この時期の教養主義に関する論考は、我が国における学生規範文化の構造を明らかにしたといえるだろう。

寮歌やスポーツによる分析は、一高をはじめとする旧制高校を対象とした。網代（1990）は、終戦直後から一高で発刊された雑誌『世代』の創刊から廃刊を整理し、『向陵時報』や『校友会雑誌』といった他の定期刊行物も手掛かりとして終戦前後の一高生の生活を回顧した。寮歌では、穂積（1991）が、一高の黎明期から終末における寮歌の展開を整理し、「末は博士か大臣か」から「大学は出たけれど」、そして「わだつみのこえ」に移り変わる学生生活の変化を明らかにした。また馬場（1998）は、一高と札幌農学校の関係・交渉の歴史を整理し、寮歌や校旗を取り上げ、校風の形成や生徒の自主性を検討した。そしてスポーツでは、鈴木（1999）が一高における意味・表象の闘争である校風を巡る闘争を通じて、スポーツが文化に含まれないという通念の起源を解明した。

明治期における学生・青年を探る研究も進展した。天野（1989）は、高等教育進学者を社会的出自、地域性、職業別分布から分析し、士族層の子弟が学生層の多数を占めたことを示した。Kinmonth Earl H.ほか（1995）は、青年の立身出世の変遷を整理し、大正・昭和初期以降の「サラリーマン」への転換を明らかにした。この研究は、学生文化を扱い「青年」の内面を対象にした

数少ない研究の一つである。この時期における教養主義、寮歌、スポーツ、青年論といった関心の広がり、高等教育改革に伴う教育課程の分析や計量的歴史社会学といった新たなアプローチに関心を示した高等教育史研究の動向（伊藤 1993）と呼応するものかもしれない。

#### （４）2000年代

2000年代以降は高等教育史研究の飛躍的な進展に伴い、学生表象研究も増加した。なかでも1990年代から続く教養主義の考察が多く見られ、宮坂（2001）は、明治期の一高における自治を分析し、旧制高校における寄宿寮自治制の成立過程と発展、教養主義の発生を明らかにした。そして、教養主義の成立から没落を整理したのが竹内（2003）である。竹内は、学生規範文化としての教養主義について大正期の旧制高校から1970年頃の大学キャンパスまで対象とし、エリート学生文化の変遷を考察した。また高田（2005）は、大正期から1930年代ファシズム期の教養主義を分析し、近代ドイツにも着目し再検討した。

マルクス主義が学生規範文化でなくなった後の分析も進められた。竹内・佐藤（2006）は、昭和戦前期の日本主義思想を分析し、昭和10年代以降、弾圧によってマルクス主義が教養主義から撤退したことによる空白を埋めたのが日本主義であることを示した。一方、永嶺（2007）は、明治初年代から130年間の東大生の読書文化史を整理し、教養主義のみが学生に影響を与えたわけでないとし、教養主義以外の学生文化規定要因を探索した。教養主義の分析がマルクス主義以外の領域にも及んだことで、これらの議論が戦前期学生・青年論の基底を形作った。

寮歌、学生歌や校風に関する研究も継続して行われた。秦（2003）は、明治期から戦後までの旧制高校の通史を整理し、事件や話題を手がかりとして、旧制高校生の生活と彼ら自身による校風の形成を考察した。また東（2006）は、寮歌・校歌・学生歌の成立過程と時代背景を収集し、学生による歌が求められた個別の状況を整理した。さらに天野（2009）は明治期の学生出自を検討し、国立学校が士族、私立学校が平民出身者中心であったことを示しており、出身階層論からの学生像の分析も着実に進んだ。

#### （５）2010年代から2020年代

2010年代以降は、校歌や寮歌によるアプローチが増えた。渡辺（2010）は、高等教育機関の校歌を含む明治期以降の唱歌の成立過程と換骨奪胎されながらも生き延びる過程を整理し、心性の変化を浮き彫りにした。また旧制高校に着目した研究として、南部（2020）は、一高を中心に寮歌の検討事項を整理し、市川（2020）は、エリートの育成、教養教育、旧制高校の意味と関係を再考する試みにおいて、寮歌にみる旧制高校の多様性から旧制高校文化の特質を見出した。近年では共同体を形成するものとしての学生歌の研究も見られる。渡辺（2024）は、校歌の「受容」側に着目し、校歌の歴史を整理することで、コミュニティ・ソングとしての校歌が形作った学校文化を解明した。そして長谷坂（2024a）は、大正末期から昭和初期の慶應義塾予科の考察を行い、高等教育拡大に直面した学生がアイデンティティ喪失と人間関係希薄化に対処するため、自治団体の形成と学生歌の作成により、自発的に紐帯形成を志向したことを明らかにした。これらの蓄積により、旧制高校

の寮歌以外の学生歌に着目する土壌が形成された。

2019年の『大学史研究』による「近代日本の学校システムによる学生の包摂と排除」のセミナーも重要な研究である。和崎（2019）は、学生の逸脱行動として学校紛擾を挙げ、「学生」の概念史における予備的考察を行った。また井上義和（2019）は、エリート学生文化の考察で中心的概念だった文学青年と社会青年の裏面史として雄弁学生と右傾学生を扱い、学生の規範文化は「上」からの押し付けではなく、学生同士の相互作用で生まれるとした。

また中等教育に主眼を当てた研究として、斉藤編（2015）がある。本書では学校表象としてのメディア『校友会雑誌』に着目し、学校文化の相剋、校風と学校文化、学校文化と生徒文化の多様な展開を解明した。この視点は、山本（2023）により、高等教育機関の学生活動分析にも有効と評価されている。また井上美香子（2019）は、1921年の福岡女学院での制服導入を通じて、スクールアイデンティティの形成過程を考察した。

学生への社会の視点に関する研究も進展した。戸村（2010）は、『実業之日本』の言説分析を通じて、初期的高等教育拡大と就職難を背景とする大正・昭和初期における大学・学生論の状況を明らかにした。そして天野郁夫は学生に関する分析を継続しており、天野（2013）は、大正期の高等教育拡大による学生像の変化を、旧制高校、私立大学を対象に検討し、マルクス主義的な社会運動の高揚が学生の左傾化と「大衆」化を促し、「恐れられる」存在に変化させたと述べた。また天野（2017）では、帝国大学の誕生から戦後国立総合大学への再編の過程を整理し、旧制高校生と帝大生の学生生活を多角的な観点で考察した。研究の拡大と裏腹に、学生表象が高等教育研究の中心的課題とされることが少ないことは高等教育史研究全体の動向（羽田 2019）と一致する。学生論、青年論が現代的課題への関心から出発し、現在の問題状況に示唆を与えることを研究者自身が自覚し、示す必要があろう。

## おわりに

これまでの分析を総括し、学生紐帯形成の形態を考察した上で、研究動向の課題と展望を述べる。学校紛擾研究は、戦前期における学生思想問題への対処として始まった。そのため占部（2004）が指摘するように、近年は異なる観点の分析もあるが、学校紛擾を未だ左翼運動の文脈のみに位置づける研究が多い。対象時期としては、1960年代以降に高等教育研究として学校紛擾研究が行われるようになると、明治期が分析の中心とされた。小野（2008）が述べる通り、大正・昭和期の研究は未だ少ない。対象校・団体としては東大新人会を扱ったものが多く、帝国大学、旧制高校以外への着目が限られている。なかでも私学は量的拡大の担い手であり、大正・昭和初期の大学昇格や進学者増加が学生に及ぼした影響は重要である。以上より、伊藤（1999）が着目した戦間期の私学を対象とした、左翼運動の文脈のみにとどまらない視点での研究の進展が期待される。

学生表象研究は、教養論や青年論を中心に展開された。学生とは何かを考える上で重要な試みであり、さらなる発展が求められる。一方で、一般に高等教育における表象といえば、旧制高校の寮歌など学生を象徴する表現が挙げられる。例えば、校歌が一校に一つ存在することは日本特有の現象であり、これは高等教育にも当てはまる。しかし、初中等教育の研究蓄積（浅見・北村 1996、

須田2020など)に比して、高等教育で校歌の体系的な研究の例は少ない。政府主導で校歌作成が進められた初中等教育と異なり、学生によって自発的に学生歌が作成された点で高等教育での分析はより必要といえる。初中等教育には、校旗(水崎 2004)や制服(井上美香子 2019)のすぐれた研究も存在する。こうした表象を通じた学生文化研究もさらになされるべきであろう。

また学生の紐帯形成は同時期の青年団と同じく、主義思想の共鳴とは無縁だったのだろうか。学生表象では「みんなが団歌をうたい、体操をし、遊戯をして喜ぶと云うのでなければならぬ」(田澤1930:75)との青年団における理解と共通する。しかし、学生の場合は特定の主義思想を持つ団体による紐帯形成も無視出来ない。例えば、東大新入会の読書による共同体の形成は、連帯の模索の事例として重要であり(永嶺 2007、後藤 2011)、記念祭等の学校行事にも深く関わった(林 1947)。しかし、自発的な校友会、寄宿寮運営による旧制高校の校風形成(高橋 1978)が示す通り、同志的交渉による紐帯形成が共感的交渉、同僚的交渉より支配的だったとは言えない。学生の紐帯形成も青年団と同じく「人間性の根幹である社交欲…に応じて、発生し又発達」(田澤 1930: 75)し、「特に青年に於て、その欲求が旺盛であ」(田澤 1930: 89)ったことは共通する。この社交欲を基盤としながら、共感的交渉、同僚的交渉に加え、学校紛擾や学生運動といった学生に特有の事象によって同志的交渉が併存した状況が学生紐帯形成の形態と言えらる。

先述の通り、学生紐帯形成の研究動向は、特に大正・昭和期における私学で不足傾向にある。大正・昭和初期は高等教育拡大による人的接触不足、就職難、社会主義の流入など、学生に影響を及ぼす要素が存在した。大学昇格を経験した私学はこれらの影響が顕著だが、伊藤(1999)や岩田(2012)等の研究はあるものの、学生の変化が十分に明らかにされているとは言い難い。谷本(2002: 77)は「大正期の大学昇格問題…いまだ十分に実証的な研究分析が深められていない状況」と指摘するが、同時期の学生文化も同様ではなかろうか。今後学校紛擾研究、学生表象研究の両面からの紐帯形成の分析が必要である。

以上の通り、高等教育史研究で主題とされてこなかった紐帯形成という観点を提示し、学生活動の動力の一端を明らかにしたことは本稿の成果である。学校紛擾、学生表象を俯瞰した学生紐帯形成研究についてさらなる展望が期待できよう。一方で、学生紐帯形成研究には、学校紛擾研究、学生表象研究に位置づけられない研究も存在する。それは日常で醸成される紐帯である。研究室や授業後の交流が該当するが、こうした関係は重要でありながら史料に残りづらい。紐帯を捉える際はこうした概念の補集合を自覚せねばならない。今後は紛擾・事件ベースにとどまらない紐帯の分析も必要である。そして個別大学の沿革史に立ち入っていない点も課題である。各機関では近年アーカイブスの整備が進んでおり、この活用によって新たな地平が開けることも望めるだろう。これらの対応が今後求められている。

## 注

引用文は原則として旧漢字を新漢字、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。また…は中略を表す。

- 1 教育法制史、法人史、創立者・功労者伝記、学制・機構・制度・カリキュラム史、儀式・式典・行事史、社会教育史、経営財政史、施設建築史、学術史（人文科学・社会科学・自然科学）、文芸史、教員史、職員史、職場史、福利厚生史、学校紛擾史、学生生活文化史、学生サークル文化史、学生スポーツ文化史、学生政治社会運動史、国際交流（学術・文化）・留学史、大学写真史、大学出版部史、地域環境史、カレッジソング史、卒業生（OB・OG）活躍史、政治（一般）史、社会経済（一般）史、統計史の28分野とその他に分類した。
- 2 同上。

## 参考文献

- 浅見雅子・北村眞一 1996 『校歌一心の原風景一』 学文社。
- 網代毅 1990 『旧制一高と雑誌「世代」の青春』 福武書店。
- 天野郁夫 1989 『近代日本高等教育研究』 玉川大学出版部。
- 天野郁夫 2009 『大学の誕生（下）大学への挑戦』 中央公論新社。
- 天野郁夫 2013 『高等教育の時代（下）一大衆化大学の原像』 中央公論新社。
- 天野郁夫 2017 『帝国大学:近代日本のエリート育成装置』 中央公論新社。
- 市川昭午 2020 『エリートの育成と教養教育—旧制高校への挽歌』 東信堂。
- 伊藤彰浩 1993 「高等教育史研究の回顧と展望」『大学論集』 22、145-161頁。
- 伊藤彰浩 1999 『戦間期日本の高等教育』 玉川大学出版部。
- 伊藤彰浩 2006 「近代日本の高等教育の歴史研究の展開」『大学論集』 36、149-168頁。
- 井上美香子 2019 「学校制服にみるスクールアイデンティティの形成に関する一考察：福岡女学院を事例として」『福岡女学院大学紀要.人文学部編』 29、13-26頁。
- 井上美香子 2023 「学校文化の形成の観点からみた福岡女学院の新聞部の活動についての一考察—現代の特別活動への示唆—」『福岡女学院大学紀要.人文学部編』 33、105-121頁。
- 井上義和 2001 「文学青年と雄弁青年」『ソシオロジ』 45(3)、85-101頁。
- 井上義和 2008 『日本主義と東京大学:昭和期学生思想運動の系譜』 柏書房。
- 井上義和 2019 「雄弁青年と右傾学生 順応と逸脱の逆説から考える」『大学史研究』 27、205-222頁。
- 岩田一正 2012 「1930年前後の学校紛擾に見られる大学の共同体化への希求:早稲田大学同盟休校を中心に」『成城文藝』 218、65-84頁。
- 潮木守一 1984 『京都帝国大学の挑戦-帝国大学史のひとつ』 名古屋大学出版会。
- 潮木守一 1986 『キャンパスの生態誌：大学とは何だろう』 中央公論社。
- 占部賢志 2004 「東京帝国大学における学生思想問題と学内管理に関する研究：学生団体「精神科学研究会」を中心に」『飛梅論集』 4、67-93頁。
- 大久保利謙 1943 『日本の大学』 創元社。
- 大隈楽 2024 「京都帝国大学における『学生思想問題』への対応—学生監の役割に着目して—」、『教育史フォーラム』 19、43-64頁。

- 大橋周治・須田四郎 1992 『戦時下学生の抵抗運動（一九三四～四五）：東大を中心とした』 ウニタ書舗。
- 大室貞一郎 1940 『学生の生態』 日本評論社。
- 大室貞一郎 1951 「学生運動の戦前と戦後」『青年心理』 2(1)、120-125頁。
- 小野雅章 2008 「1920～30年代にかけての学校事件・学校事故史研究素描—学校紛擾の展開を中心に—」『教育制度研究紀要』 39、1-17頁。
- 兼安章子 2019 「教師の紐帯形成に関する研究：学校内外における同教科教師間の関係に着目して」九州大学博士論文。
- 唐木順三 1949 『現代史への試み』 筑摩書房。
- 唐澤富太郎 1955 『学生の歴史』 創文社。
- 河合榮治郎、蠟山政道 1932 『学生思想問題』 岩波書店。
- 菊川忠雄 1947 『学生社会運動史』 海口書店。
- 木村元 1997 「戦時期の教育史研究の動向と課題—近年の教育科学運動研究に注目して」『教育学年報』 6、199-214頁。
- 後藤美緒 2011 「戦間期における学生の読書実践—東京帝大新人会の共同性の模索—」『社会学評論』 62(1)、51-68頁。
- 斉藤利彦 1995 『競争と管理の学校史—明治後期中学校教育の展開—』 東京大学出版会。
- 斉藤利彦編 2015 『学校文化の史的探究 中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして』 東京大学出版会。
- 佐藤秀夫 2005 「学校紛擾の史的考察」『教育の文化史2 学校の文化』 阿吽社、229-276頁。
- 佐藤守 1970 『近代日本青年集団史研究』 御茶の水書房。
- 佐藤能丸 2003 『大学文化史—理念・学生・街—』 芙蓉書房出版。
- 杉山謙治 1930 『日本学生思想運動史』 日本基督教青年會同盟学生運動出版部。
- 鈴木康史 1999 「近代日本における『文化』と『スポーツ』の起源に関する研究—大正教育派を中心に—」『体育・スポーツ哲学研究』 21(1)、9-29頁。
- 須田珠生 2020 『校歌の誕生』 人文書院。
- 大学新聞連盟 1948 『現代学生の実態』 鱒書房。
- 高田里恵子 2005 『グロテスクな教養』 筑摩書房。
- 高橋佐門 1978 『旧制高等学校研究 寮歌・校風論篇』 昭和出版。
- 竹内洋 1999 『学歴貴族の栄光と挫折』 中央公論新社。
- 竹内洋 2001 『大学という病：東大紛擾と教授群像』 中央公論新社。
- 竹内洋 2003 『教養主義の没落：変わりゆくエリート学生文化』 中央公論新社。
- 竹内洋・佐藤卓己 2006 『日本主義的教養の時代：大学批判の古層』 柏書房。
- 田澤義鋪 1930 『青年団の使命』 日本青年館。
- 豎山利忠・石堂清倫 1976 『東京帝大新人会の記録』 経済往来社。
- 田中紀行 1992 「戦時下日本の教養主義—「学生叢書」を手がかりとして—」戦時下日本社会研究

- 会『戦時下の日本：昭和前期の歴史社会学』行路社、227-243頁。
- 谷本宗生 2002 「大学史・高等教育史研究の課題と展望」『日本教育史研究』21、67-84頁。
- 玉城素 1961 『日本学生史』三一書房、24-43頁。
- 筒井清忠 1992 「昭和前期におけるエリート文化としての教養主義—読書調査にみる学歴エリート文化の変遷—」前掲『戦時下の日本：昭和前期の歴史社会学』、201-226頁。
- 筒井清忠 1995 『日本型「教養」の運命：歴史社会学的考察』岩波書店。
- 寺崎昌男 1971 「明治学校史の一断面—学校紛擾をめぐって—」『日本の教育史学』14、24-43頁。
- 寺崎昌男 1986a 「大学史・高等教育史研究の課題と展望」『日本教育史研究』5、113-122頁。
- 寺崎昌男 1986b 「日本における大学史研究の動向と課題—大学沿革史編纂を中心として—」『東洋大学史紀要』4、1-34頁。
- 戸坂潤 1936 『思想と風俗』三笠書房（2001年、平凡社発行版を参照）。
- 富岡勝 2004 「学生団体「自彊会」による京都帝国大学の校風改革運動」『京都大学大学文書館研究紀要』2、55-75頁。
- 戸村理 2010 「大正・昭和初期における大学・学生観—雑誌『実業之日本』における言説分析を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』49、161-72頁。
- 戸村理 2019 「はじめに：開催趣旨 大学史・高等教育史研究のこれまでとこれから」『大学史研究』28、2-8頁。
- 永嶺重敏 2007 『東大生はどんな本を読んできたか：本郷・駒場の読書生活130年』平凡社。
- 中村勝範 1997 『帝大新人会研究』慶應義塾大学法学研究会。
- 南部直樹 2020 『旧制高等学校寮歌私観 II 寮歌研究』創英社／三省堂書店。
- 西山伸 2007 「課題と展望 大学沿革史の課題と展望」『日本教育史研究』26、39-55頁。
- 能勢岩吉 1931 『最近学生左翼運動秘録』万里閣。
- 長谷坂大樹 2024a 「大正末期から昭和初期における学生の紐帯形成に関する考察—慶應義塾予科会の成立と応援歌『若き血』の作成—」『大学経営政策研究』14、109-125頁。
- 長谷坂大樹 2024b 「昭和初期における学生自治権獲得運動の展開—慶應義塾を事例として—」『大学史研究』33、60-83頁。
- 秦郁彦 2003 『旧制高校物語』文藝春秋。
- 羽田貴史・大塚豊・安原義仁 2007 「大学史・高等教育史研究の10年」『高等教育研究』10、31-50頁。
- 羽田貴史 2019 「大学史研究会と大学史研究：日本を対象に：半世紀で明らかになったことと多すぎる課題」『大学史研究』28、9-30頁。
- 馬場宏明 1998 『大志の系譜：一高と札幌農学校』北泉社。
- 林要 1947 「新人会のころ」東京大学協同組合出版部編『歴史をつくる学生たち』、135-188頁。
- 東忠尚 2006 『学生歌とその時代：寮歌・校歌・応援歌の物語』新風舎。
- 穂積重行 1991 『寮歌の時代』時事通信社。
- 三木清編 1937 『現代学生論』矢の倉書店。
- 水崎雄文 2004 『校旗の誕生』青弓社。

- 宮坂広作 2001 『旧制高校史の研究：一高自治の成立と展開』 信山社。
- 宮澤康人 2011 『〈教育関係〉の歴史人類学—タテ・ヨコ・ナナメの世代間文化の変容—』 学文社。
- 山本珠美 2023 「企画趣旨：大正・昭和戦前期の学生課外活動の検討」『大学史研究』 32、2頁。
- 吉野作造 1932 「日本学生運動史」『岩波講座教育科学』 15、3-34頁、岩波書店。
- 和崎光太郎 2019 「ピラミッド型学校階梯の機能:包摂が生み出す「排除」、排除が生み出す「包摂」」  
『大学史研究』 27、205-22頁。
- 渡辺かよ子 1997 「近現代日本の教養論 1930年代を中心に」 行路社。
- 渡邊隆信 2020 「『共同体としての学校』の起源と史的展開」『教育学研究』 87(4)、495-507頁。
- 渡辺裕 2010 『歌う国民：唱歌、校歌、うたごえ』 中央公論新社。
- 渡辺裕 2024 『校歌斉唱！：日本人が育んだ学校文化の謎』 新潮社。
- H.スミス 1978 『新人会の研究—日本学生運動の源流』 東京大学出版会。
- Earl H. Kinmonth ほか 1995 『立身出世の社会史—サムライからサラリーマンへ』 玉川大学出版部。
- Roden Donald・森敦 1983 『友の憂いに吾は泣く：旧制高等学校物語』 講談社。

# A Historical Review of Research on Developing a Community of Students in the Prewar Period

Daiki HASESAKA

## Abstract

This study examines research on the development of a community of students in the prewar period in Japan and discusses future prospects. By analyzing the prewar period, which marks the origin of higher education in Japan, the factors influencing student activities that remain relevant today are identified. The aforementioned research encompasses studies on school disturbances and student representations. Research on the former investigates school disruptions and student movements, while that on the latter explores aspects of culture, including school uniforms, school flags, and college songs.

This study derives three main conclusions:

- (1) Many studies still primarily focus on analyzing school disturbances from the viewpoint of leftist movements.
- (2) A limited number of studies exist on student representations in higher education regarding school flags, uniforms, and college songs.
- (3) Developing a community in groups such as “Seinendan” includes the common element of youth seeking social interaction.

A lack of research on private universities, especially in the Taisho and Showa periods, is noted. By utilizing the historical records and archives of individual universities, the research on developing a community of students can be further advanced by examining school disturbances and student representations.